洋上の対話
——世界に向かう中日知識人の精神構造

銭　国紅

1

十九世紀中葉までの日本人は、長崎という世界に開かれた窓を通じて、西洋の文化及び中国経由の西洋の文化や情報を得ていた。蘭学者を始めとする多くの知識人が西洋への視野を持ち、一部には西洋を理想化する向きがあったにせよ、一般的には文明的主体性を強く保ち、日本を中心とし、他に中国あり、西洋ありという相対的な世界像の持ち主がすでに大勢を占めていたと言える。だがそれでも、一八六〇年（万延元年）におこなわれた日本使節の初めてのアメリカ訪問は、幕末のエリートたちを世界に周遊させ、異境の人間と物に実際に触れさせることによって、世界的視野の一層の拡大を招来する結果となり、同時に在来の世界像や文明観に大変化をひきおこす絶好の契機となった。

十八世紀末以来、日本人は対外的な危機意識や蘭学の隆盛によって、不完全でありながらも、世界的な視野を獲得していった。だが西洋の存在をもっとも強烈に思い知らされたのは、やはり清朝中国のアヘン戦争における敗北という事実であった。そして一八五三年（嘉永六年）、黒船に乗ってやってきたアメリカ人が日本に開国を迫った。西洋事情や西洋の学問に好奇心を抱きつづけてきた日本人は、恐怖を覚えながらも、アメリカという未知の世界からやって来た使者達にどういう対策をとるべきか躍起になって議論した。攘夷か開国か、国中の人にその選択が迫られた。折りしも、中国からアヘン戦争の経験を語った魏源の世界論『海国図志』が届いた。この書は「夷の長技に師し以て夷を制する」という戦略的な発想を持っていたために、たちまち同時代の日本知識人の評判を得た。アメリカという未知の国と向かい合う現実を前に、魏源の世界論は深い共鳴や

多大な啓発を幕末志士に与えたのである。アメリカを始め、世界万国の「長技」を取り入れる以外に進むべき道はないという現実認識は、幕末知識人が危機を目前にしてあがなったものであり、また魏源の世界論にも共通した結論であった。

遠い彼方の西洋世界をただ眺めるだけでは、その不思議さの中身をいつまでも捉えきれないと自覚した幕末の日本人は、まもなく実際に西洋世界の地に足を運んで自分の目で世界を確かめ、検証しようと動き出す。

一八五三年、佐久間象山が老中阿部正弘に西洋の「形勢事情をまのあたり探索」するための「人才」派遣を上申し、同年とまた翌年、吉田松陰は師象山の示唆に従い、「夷情」の探索を目的に、長崎と下田で二回に亘って夷船に潜入して、海外に密航をしようとした。（どちらも空振り、失敗に終ったことは周知のとおりである）。一八五七年（安政四年）には、幕府はオランダ国へ留学生を派遣し、また他のヨーロッパ諸国や、アメリカ等へも留学生や視察員を送る方針を探りはじめた。島津斉彬も米英仏三国への留学生派遣を構想しはじめている。[1] 同じ一八五七年、幕府内部からも『日米修好通商条約』の批准書交換のために、遣米使節を派遣する声が上がった。[2]

幕府によるアメリカへの使節派遣は、三年後の一八六〇年（万延元年）になって初めて実現された。しかも実際に米艦ポーハタン号に乗ったのは立案した水野忠徳や岩瀬忠震ではなく、正使新見正興、副使村垣範正となっていた。前者二名の名前は安政の大獄をはさんで、使節のリストから消えたのである。さらに別行艦たる咸臨丸に乗り組んだ一行には、艦長勝海舟（一八二三～九九）のほか、後に文明論で一世を風靡する福沢諭吉（一八三五～一九〇一）も従者として名を連ねていた。

航海術に接したばかりにもかかわらず、西洋人に劣らない艦船の操縦が出来たことに自信満々であった福沢諭吉も、実際にアメリカの地についてみると、大きな文化ショックを受けずにいられなかった。彼の心を震撼させたのは、決して「アメリカ人の考に、そういうものは日本人の夢にも知らないことだろうと思って見せてくれた」[3]ような工場でのテレグラフや砂糖の製造原理ではなく、馬の引く車である「馬車」や、八十畳も百畳もあるような恐ろしい広い場所に敷きつめてある贅沢な「絨毯」、そして靴のままでさっさとその絨毯に上がるアメリカ人の姿、変な味のする酒「シャンパン」と、そのコップの中に浮いている氷、煙草に点火するための「マッチ」、はたまた貴女紳士が打ち寄って妙な風をする「ダンシング」といったような各種の風俗習慣であった。異境の奇妙な人間生活の実態と、彼らの使う日常品という「社会上の習慣風俗」[4]こそが、青年福沢諭吉の精神世界に絶大な刺激を与えたのである。

アメリカ社会の日常生活は東洋の一知識人福沢諭吉を魅了し、彼を全く異質な文明世界に導いてしまう力をもっていた。彼は西洋の

学問や最先端技術については、「此方は日本に居る中に数年の間そんなことばかり穿鑿していたから、ソレは少しも驚くに足らない」[5]と思っていたが、一方で初めて目にする日常品や人間模様の奇妙さに関しては驚きを禁じえず、感嘆してやまなかった。その好奇の目は、多くの鉄が塵同様に捨ててあることや物価が高いことなどといった子細な観察から、ワシントンの子孫に対するアメリカ人の冷淡さという問題に至るまでの「社会上政治上経済上」[6]の全体へとしだいに向けられていった。青年福沢の眼前には不思議な世界が広がっていくばかりであった。「日本を出るまでは天下独歩、眼中人なし怖い物なしと威張っていた磊落書生も、初めてアメリカに来て花嫁のように小さくなってしまった」[7]という福沢の言葉から、その衝撃の大きさを知ることができる。

福沢諭吉の文化ショックは、幕末の一知識人の西洋認識の盲点を突いたものといえよう。長い間徳川日本では西洋の天文、地理及び医学や軍事技術等の分野において学問的な蓄積を遂げてきた一方で、西洋の人間社会に関する具体的な様相の研究を不問にしてきた。つまりこの未完成の宿題が福沢諭吉に文化ショックとして響いたのである。感受性の強い青年であった福沢は、アメリカという別世界の観察を通じて、逸早く自分の西洋社会に関する知識の偏頗や薄さに気付き、東西世界の文明的な差異を感じた。これこそ彼の西洋文明へと向かう精神的な、知的な旅の始まりであって、彼を啓蒙思想家として鍛え上げ、明治日本に文明開化の怒濤を巻き起こさせるための入門レッスンであったといってもよい。

深い感銘を受けてアメリカとやがてヨーロッパとを見回った福沢は、自らの体験に基づく文明開化論を日本の取るべき唯一の正しい道としてその後一生主張しつづけた。彼の活動は、まず世界事情や世界地理学の知識を一般庶民を中心とする社会全体に浸透させることに始まった。かつて自らの印章に世俗の意を寓した「三十一谷人」と彫り込んだ経緯からみても、彼が一般民衆に対する啓蒙をいかに自分の義務として強烈に自覚していたかが分かる。[8]彼は、「唯早分り易き文章を利用して通俗一般に廣く文明の新思想を得せしめ」「世俗と共に文明の佳境に達せんとする」願いをもって、『西洋旅案内』や『掌中萬國一覽』等の世界地理の通俗啓蒙書を出版し、「唐人」[9]嫌い、つまり外国人嫌いの日本中の人々に自ら理解した文明的な西洋像を必死になって示そうとしたのである。

アメリカについで、一八六二年（文久二年）にはヨーロッパへの視察も果たした福沢諭吉は、一八六五年（慶応元年）、当時は未公刊だった「唐人往来」において自らの新しい世界認識を提示し、世の中の外国嫌いや攘夷派を批判した。

大凡世界の廣さ一里坪にして八百四十萬坪程あり。此廣き地面を五に分ちこれを五大洲と云ふ。亞細亞洲、歐羅巴洲、亞米利

加洲、亞弗利加洲、澳太利洲なり。右五大洲の中、亞弗利加、澳太利は下國にして、（中略）亞米利加洲も北亞米利加の合衆國は別段開けたる國にて世界中第一番の上國とも云ふべき程なれども、其外は格別目ぼしき國もなし。唯一洲の内不殘繁昌して學問も武術も格別に世話行屆き、砲術調練の盛なるは勿論、其外蒸氣船、蒸氣車等、便利よき道具を造り、人手を費さずして師の備も爲し平日の用も達し、安樂にして國の强きは歐羅巴洲に限るなり。(10)

ここで福沢諭吉は世界五大洲を序列的に捉え、アメリカやヨーロッパ諸国を上等国、アフリカ等を下等国として位置づけた。つまり文明の最高極をアメリカやヨーロッパ諸国に置き、その対極を亜弗利加洲、澳太利洲に置いた。一方ではアジアについて次のように述べている。

亞細亞洲も隨分よき大洲にて人の數も多く產物も澤山あり、小細工物などは世界中に名を賣りたる程巧者に作り出し學問も出精し、中々亞弗利加、澳太利の比類にはならざれども、兎角改革の下手なる國にて、千年も二千年も古の人の云ひたることを一生懸命に守りて少しも臨機應變を知らず、むやみに己惚れの强き風なり。(11)

アジアは、上等国である西洋諸国やアメリカと下等国であるアフリカ、オセアニアとの中間に位置しているとする。ここに描かれるのは、昔の教条にこだわり、必要に応じて自己改造をすることを怠って、頑なに外部世界との接触を拒否する閉鎖的なアジアの姿である。ここにいう西洋諸国とは英吉利・仏蘭西・魯西亜・伊太利等を指し、アジアとは日本・唐土・暹羅・安南・天竺等を指している。アジアの一部として在来の姿勢を堅持し、下等国に落ちる危険に晒されていくか、開国開化して上等国になるかという選択に迫られている日本像がすでに福沢諭吉の脳裏に滲みでていると言える。こうした自己認識や危機感を持っていなかった多くの日本人に対して、「唯西洋の事實を明にして日本國民の變通を促し、一日も早く文明開化の門に入らしめんとする」という使命感こそ、福沢諭吉の啓蒙家たるゆえんであった。啓蒙家福沢にとっては、なによりも民衆に正確な西洋知識や世界像を伝えることが、文明開化への第一歩であった。

幾千百年來蟄居の人民が俄に國を開て世界に交らんとするには、先づ其世界の何物にして何れの方角に位するやを知り、其地名を知り其遠近を知るは最も大切なることにして、前年は唐天竺とて世界の末端と心得たりしに、今は唐天竺の外に歐羅巴、亞

米利加等も出現し來り、隨て人の眼界は舊時に幾倍して廣からざるを得ず。眼界の廣きは取りも直さず世界を狹く思ふことなれば、兎に角に全國民をして世界を觀ること日本國内を觀ると同樣ならしめんと欲し、……[12]

世界に向かって国を開くには、まず世界の全体像を把握し、その形、方位、地名、距離を知るべきである。昔は唐や天竺を世界の果てと考えたが、今や天竺の外にヨーロッパやアメリカが現れた。従って人々の視野は旧来の何倍にも広がらなければならない。視野の開拓は即ち世界の縮小である。故に日本のことを知るのと同じように世界万国を究めるべしという。彼が『西洋旅案内』や『掌中萬國一覽』のような旅行案内書を数々ものしたのも、文明世界の洗礼を受けよという啓蒙家の、一般大衆に対する強いアピールのためであった。

福沢が勧める文明世界の代表は、もちろん「世界一學問の世話行届き、人情おとなしくして兵力強く、禮儀正しくして國富み、天然の産物は少けれども人の工夫にて物を造り、陸には蒸氣車を用ひ海には蒸氣船に乘り、何事も便利を盡し文武ともに盛んなる」ヨーロッパとアメリカである。このヨーロッパとアメリカへ行くために書かれた旅行ガイドが『西洋旅案内』であった。本書は両地の一般事情の紹介と共に、行程、路線、船の運賃の支払い方から為替のこと、世界の時差、経緯度、国際通貨の相場[13]にいたるまで、文明論的な議論を挟みながら克明な実用的知識を提供していた。これは理論篇から実践篇まで含んだ文明世界への道案内であったといってよい。

一般大衆を対象として、同じ趣旨に沿ってより総合的に書かれた世界地理書『掌中萬國一覽』[14]では、地球五大洲の紹介を始めとして、世界の海洋と山、人口、人種、文明と野蛮の区別、言語を記述し、さらにヨーロッパの帝王変遷史、ヨーロッパ五大国（イギリス・フランス・オーストリア・プロシア・ロシア）とアメリカ、さらに西洋各国の鉄道の長さ、鉱物の有無、世界の大都会の経緯度等を詳しく述べている。例えば、文明と野蛮の別について、次のように定義づけている。

人間生々の景況に從ひ、これを區別して二種と爲す。曰、蠻野、曰、文明、是なり。蠻野とは、居に常處なく、食を追て此彼に移轉するものを云ふ。文明とは、常處安宅に居り、禮儀を知り、宗旨を信じ、工を勤めて、順序を守り、以て天與の幸福を享るものを云ふ。

此二種を更に分て四類と爲す。曰、混沌、曰、蠻野、曰、未開、曰、開化文明、是なり。[15]

西洋人の文明論をそのまま受けついだ筆者は、在来の「華夷」的

な文明野蛮の概念や範疇を、明らかに西洋的な文明価値に全般的に切り換えた[16]。西洋文明の世界における絶対的な地位を素直に認めた上で、日本の置かれた文明的位相を照らし出そうとしていたのである。ここではアフリカや大洋洲の住民を混沌の民とし、ダッタン、アラビア、アフリカの住民を蛮野の民とし、中国、トルコ、ペルシャを未開の民とした。アメリカ、イギリス、フランス、ゲルマン人は開化文明の民とされている。肝心の日本人については、文明なのか野蛮なのか、その帰属を明確にはしていない。或いは福沢はこう思っていたのかも知れない。日本は文明開化の必要な国であり、当然まだ文明の境地には達していない。しかしこれから文明国に近づいていく用意がある。故に日本を文明への発展途上国として位置づけてよいのではないかと。この文明論は、そのまま作者の世界像の構成や日本人の自己意識の深層を示すものであり、その後につづく明治期日本の西洋文明学習の根拠となり、文明開化運動の基準となるものであった。新井白石以来の蘭学知識人が築き上げてきた世界地理における西洋中心的な視点は、ここに至って西洋を頂点とする文明的に序列化された世界像に帰着し、揺るぎないものとなった。福沢における世界地理啓蒙活動を通じて、地理空間的な視点と文明的な視点との連結が深められ、日本人は空間的な世界像と観念的な世界像を統合できるようになった。以後の日本にとっては、ヨーロッパやアメリカという名前は、地理的概念という以上に、文明的視点から見た概念であった。アジアやアフリカという名が、すなわち未開と野蛮の代名詞になり、ヨーロッパやアメリカといえば、文明と開化という連想がすぐに湧いてくる程、啓蒙思想家福沢の世界地理論が近代日本人の世界像の視軸を決めてしまっていたのである。それは現在に至っても尚、日本人の西洋側に傾いた世界映像を喚起し続けている[17]。

2

一方同時代の清朝中国でも、アヘン戦争の敗北を通じて、産業革命を経た西洋世界を正視せざるを得なくなり、西洋世界との付き合いをせざるを得なくなった。魏源の「夷の長技に師し以て夷を制する」という主張は、清中国知識人が西洋を正面から受け止めようとする決意を表したものといえよう。魏源自身は西洋に現地考察に赴く機会に恵まれなかったが、彼以後、多くの中国人が地球の向こう側に足を運び、世界とはなにか、世界における中国とはなにかという問題を深く思索し、再確認するようになる。

マカオは南の辺鄙な土地であったが、同時に中国でもっとも早く西洋人の進出を受け入れた場所であった。一八四七年一月四日、マカオ宣教師学校に学ぶ、科挙の制度とは無縁な三人の中国人少年が米国人教師S・R・ブラウン（Rev. Brown）の協力を得て、黄埔港から帆船「亨特利思号（ハントレス）」（Huntress）に乗って、アメリカの旅へと

出発した。西へと進んでインド洋を通って、喜望峰を回り、大西洋に入って北上し、ニューヨークに至る行程である。アメリカについたのは一八四七年四月一二日、航行日数は九十八日間だった。三人の中に、容閎[18]（一八二八～一九一二）という少年がいた。

幼少時に父を亡くし、貧しい生活を強いられていた容閎は、母のすすめで、外国人の作った宣教師系の学校に入ったのである。彼の母は直観で東西交流の時代の流れをキャッチしたのかも知れない。これまでの出世コースとは無関係と知りながらも、少年容閎を将来西洋人との商売に役立つ西洋人宣教師系の学校に送ったのである。そして米人教師の好意を受け、アメリカへと旅立った少年容閎は、七年後（一八五四）、エール大学の卒業証書を抱えて、ニューヨークから「欧里加号」（Eureka）に乗って、中国に帰った。その後、彼は西洋文明を中国に伝えることを自分の使命として自覚し、中国とアメリカを行き来し、中国をアメリカのような国にすることを一生の夢として見つづけたのである。しかしその理想はついに母国である清末中国から十分な理解を得られず、さまざまな失敗を重ねた挙げ句、アメリカで生涯を終えた。『西学東漸[19]』という自伝で、容閎は中国人として西洋文明と中国との間に橋を架けようとした自らの人生をふりかえった。そこには清中国に「西学」の導入を図り、清の朝廷にアメリカへの正式な留学生派遣を建議し、太平天国の革命に希望を抱いて太平軍の首領と接触し、必死に中国と外の世界との繋がりを強め、中国を改造しようとした容閎の姿が精彩に描かれている。

そもそも容閎の「西学東漸」活動は西洋文明を取り入れるための人材の育成に始まっている。一八六三年、容閎は時の政府の重鎮、両江総督曾国藩（一八一一～七二、清の名臣、湖南湘郷の人）にアメリカへの少年留学生派遣を要請し、賛意を得た。一八七二年（同治一一年）、清朝廷から初めてのアメリカへの留学生派遣が実現し、一二〇名の少年留学生（一二～一四歳）を先後四期（一期三〇人）に分けてアメリカの大地へ送ることとなった。アヘン戦争を二回も経験した清政府は、一八六一年、ついに「総理各国事務衙門」を設けて、在来の「夷務」を「洋務」と呼び直し、翌年北京で「同文館」を設立して、「洋文」に通じ、「洋務」を習う人材を育てる態勢を作っていたが、このような背景のもとに、洋務運動の推進者曾国藩、李鴻章等が容閎の留学生派遣計画に着目したのである。しかし容閎の目的は少年留学生の派遣を通じて「借西方文明之学術以改良東方之文化[20]」（西洋文明の学術を以て東方の文化を改良する）にあったのに対して、上述の洋務運動家たちの関心はあくまでも西洋の天文、地理、軍事、造船、算術、機械製造諸学等[21]の技術に向けられていた。容閎の「西学」による中国文明改造論と洋務派「西学」による「中学」補助論は、まもなく衝突の局面を迎えた。一八八一年、すでに西洋の空気にすっかり馴染んで、十五年の学業計画の半分ほどを終

えていた若い留学生たちは、急遽全員召還されてしまった。十五年のちに帰国するはずの少年留学生を、九年目で全員引き揚げさせた理由は、少年たちの「洋化」（Americanization）にあった。曾国藩の後を継いだ李鴻章とその周辺は、アメリカ化された少年留学生の帰国を危惧していたのである。こうして少年留学生派遣は途絶え、それによって、容閎の「西学東漸」計画は早くも挫折を迎えたのであった。

召還された留学生たちはその後、朝廷の用意した再教育を経た後、再び清末の激動の社会に溶け込んでいく。もちろん彼らの留学経歴は決して無駄ではなかった。少年留学生の中には、三十数年後の一九一四年に徐世昌内閣の交通総長（梁敦彦、?～一九二三）になった人もいれば、中華民国初の国務総理になった人物（唐紹儀、一八六一～一九三八）もいた。また初めて中国の自力によって、北京―張家口の鉄道を敷設した技術者詹天佑も元少年留学生であった。但し彼らの中から、日本の福沢諭吉のように文明論を呼びかける啓蒙思想家は一人も出なかった。中途半端に「洋化」された少年留学生は、中国文明の薫陶が足りなかったせいで、中国的な「近代化」に要求される東西文明の対決を一身に引き受ける力量がなかったのかも知れない。しかも彼らの戻った清末の中国には、西洋文明を相対的な一文明として見ることはあっても、それを自国の対極に位置づけ、自国の未開を裏付ける参照とする考え方は極めて希薄であった。少年留学生を待っていたのは再びこの大きな古い環境に同化されていく運命であったし、それを乗り越えていこうとする意識はそこに少しも生まれることがなかった。

少年留学生の前に東西両文明の差異の壁が立っていることを意識せず、西洋人とまったく違わない人材を中国のために育成しようとした容閎の希望と、西洋化した少年は決して中国の現実に適応しえないと判断した朝廷の認識との差は、異なった文明の歴史をもつ東西社会の歩み寄りの難しさを物語っていたと言える。これは清末社会の西洋化に対する警戒心の現れでもあった。中国人を西洋文明の境地に誘おうとした容閎自身は、もともと幼いころから大学まで一貫してアメリカの学校教育を受けた人間で、中国的な学問教養を殆ど持たない「洋化」人であった。容閎とその「西学東漸」の挫折は、中国式の近代化における「西洋化」拒否の所産といってもよい。「以西方之学術、灌輸于中国、使中国日趨于文明富強之境」[22]（西洋の学術を以て、中国に輸入し、中国をしてますます文明富強の境に赴かせる）という容閎の中国改造への愛国心も、結局は母国に対する片思いに過ぎなかった。

3

一八七一年三月一七日、清中国の対仏外交交渉の使命を帯びた公使崇厚[23]（一八一七～九三）と随行の通訳張徳彝[24]（一八四七～一九一八）

は、パリ・コミューン革命が爆発する前日にフランスの首都パリに着いた。「太子少保、三口通商大臣、兵部左侍郎」[25]崇厚の通訳である張徳彝は、後に光緒帝の英文教師を務めたり、遣外使節団を率いる大臣にもなったりするが、この時は、まだ一介の「兵部候補員外郎」であって、二三歳の若人であった。しかし彼のフランス入りはすでに四回目であった。一八六六年、彼は同文館の学生として初めてヨーロッパを歴遊した。後に旅行記『航海述奇』を書いて、自らのフランス外遊を紹介した。一八六八年には、清中国の初めての西洋への外交使節団と共に、再びフランスに赴いた。その経過は後に『再述奇』に書かれている。今回の四回目のフランス滞在期間はほぼ一年間である。その間に彼はフランスをめぐる様々な歴史的な場面に遭遇し、滞在中、或いは往復途中で、西洋人や同じ東洋からやって来た日本人使節と様々な対話を経験した。その経緯は『三述奇』に詳しく記されている。

『三述奇』のなかで、彼は、世界や文明についての西洋、日本、清中国の知識人それぞれの異なった受け止めかたを紹介し、世界に向かって出発した中日両国知識人の異なった精神構造を浮き彫りにしている。未知なる「世界」に対する好奇心と、これからの世界はどうあるべきかということに対する探究心が高まるなかで、両国知識人は共に西洋をめざそうとしていた。その途中で、会話や漢詩の応酬を通じてときに見事な精神的触れ合いを示すことのあった両者ではあったが、それぞれの文明意識や西洋への認識においては大きな差を見せている。そういったことに気づきながらも、ためらいなく感情を交流させ、意見をぶつけ合せた清末中国の知識人と明治日本の知識人との遭遇は興味深い。そこには、張徳彝一個人だけではなく、その時代の中国人の、或いは日本人の世界認識とそれぞれの自国像とを読みとることができるだろう。

張徳彝の意外な日本発見は、フランスへの旅程の途中にすでに始まっていた。『三述奇』では旧暦一八七〇年一〇月二〇日（ここでは旧暦は西暦より一ヵ月余り遅い、旧暦の一八七〇年一一月一一日は、西暦では一八七一年元日になる。旧暦の一八七〇年一〇月二〇日は新暦一二月一〇日となる。ここではそのまま旧暦を示す）、張徳彝は「スガマンダ号」に乗って、午後一時一五分ごろ、安南国嘉定省（ベトナムギャーティン）に着き、三時、港に入り、八時、船が西貢（サイゴン）から約二六、七里もあった河面に止ったと記述し、そして同船の日本人六、七人と筆談をしたと記している。そこで、彼は日本人から日本の天皇や年号のこと、現日本が明治三年であることを教わって、また初めての日本語「欧海欧」（お早う）、「果吉延尤」（御機嫌よう）、「海」（はい）、「伊業」（いいえ）、「阿立牙頭」（有り難う）[26]を耳にした。同二一日、「スガマンダ号」は一旦西貢に停泊し、乗客たちが見物などに上陸した。二二日、船は港を発って再び航行を始めた。同二三日、西貢を後にしつつある船に乗った張徳彝は、西の虹が逆

さに海に映って、幻境のような朝を迎えるなかで、日本について、はからずも西洋人と次のような議論を交わすこととなった。同船の訥武英（張徳彝が漢字で記述した名前）という西洋人の一人は（おそらく張徳彝にも分かる英語で）言った。

今日本国学習各国文武兵法、効験極速。貴国亦宜有備、方可無虞。即以諸公所着鞋底論之、足見其蠢笨不霊欸。[27]

今日本国は各国の文武兵法を学び、早くもその効果が出はじめている。貴国も備えをすべきだと思う。そうすれば外からの脅威から解放されるだろう。例えば貴方たちの履いている靴の底で以て言っても、明らかにそれは重くて愚かで動かしにくいものである。

つまり、この西洋人は明治期日本の急速な西洋文明学習を褒め、清中国も日本と同じようにすることを勧めた上に、張徳彝らが履いている装飾された布製の官用靴の重苦しさを風刺することによって、清中国の西洋化拒否を批判したのである。これに対して、張徳彝は次のように述べた。

即以鞋底観人、其真仮虚実、亦可略見一斑。貴国鞋底、必先薄而後厚、雖厚亦只四分之一。日本鞋底、前後実而中空、雖実不足四分之一。皆不如我国鞋底、首尾一律。以之待人、亦必始終如一、不致易轍改弦也。[28]

たとえ靴底を以て人を見ても、その真か贋か、虚か実かについて、おおよその見かたができる。貴国の靴底は、必ず表底が薄く、かかとが厚い。厚い部分は靴全体の四分の一ぐらいしかない。日本の靴底（目の前の日本人は洋靴を履いているはずで、ここでは、張徳彝が日本の下駄のことを意識して言っているのかもしれない）は、前と後ろが充実しているが、真ん中は空っぽで、厚い部分は靴全体の四分の一ぐらいにも達しない。どれも我が国の靴底に及ばない。我が国の靴底は首尾が一致していて、もって人に接すと、亦必ず終始が一の如く、簡単に方向を改めたりしない。

張徳彝は西洋の靴底と日本のそれにそれぞれ欠陥があることを指摘し、やや牽強附会ではあるが、中国の靴底のよさを立証しようとした。但しもともと当の西洋人の靴底論は文明論の話の種に過ぎなかったので、張徳彝も自然に話を文明論で結んだ。実は彼は西洋や日本の靴の底が理想的ではないというのは、中国の靴底のよさよりも、中国人の文明指向の一貫性を強調したがっていた。それと対比する形で、簡単に西洋文明に転向してしまう日本を暗に揶揄したのである。論争は当時の西洋人から見た日本と中国人から見た日本のイメージとの差を如実に現した。しかし、西洋人の口から日本の成功談を聞いた張徳彝は、いささかショックを受けずにはいられなかった。これをきっかけに、彼の明治日本の変化に対する関心は以後

高まっていく。『三述奇』に見える多くの日本関係の記述は、こうした作者の心理を表していると思われる。

翌一〇月二四日、張徳彝はふたたび同船の日本人遣欧公費留学生[29]たちから明治四年（一八七一）の廃藩置県についての説明を聞き、日本語の数詞を教わった[30]。午後、船は「新嘉坡」（シンガポール）に止まった。夕刻、中国人、タイ人の小売の雑踏や船からの貨物のあげおろしを眺め、騒然たる物音を耳にしながら、ふたたび日本人の若い留学生たちと主に儒教の問題をめぐって次のような遣り取りをした。——

日本人の一人がたずねた。「貴国の兵艦の数は幾つであるか」

彝は答える。「東南の海に無数の砲船がある」

また問われた。「孔夫子の胤はどうなっているのか」

答えて、「千年以来、既に世襲の衍聖公として封され、実に海内の師表というべきである」

また問われた。「貴国は皆儒教を奉ずるのか」

答えて、「儒教は太陽と月が天空に掛かっているのと同じように、万古不滅で、たとえ他の教えを奉ずるものがいても、億人の中の一、二人に過ぎないだけだ」と。

続いて彝がたずねた。「日本は何の教えを奉じているのか」

相手は答える。「我が国には国教があり、しかも儒教を以て翼賛としている。昔愚民が仏教を信じたが、今皆廃止された」

また問う。「国教はどんな教門か」

曰く、「君に忠、親に孝、これが天下の公法である」

問う、「忠孝の二字は、どんな教えより伝えたのか」

答えて、「皇祖皇孫、心伝授受、政治に施し、書物に記す」

問う、「皇祖皇孫とは、もとは何教によったのか」

答えて、「皇祖は天御中主神と謂う、我が国の開闢の祖である。皇孫はその子孫の継承と相続を謂う」

彝は不思議に思ってたずねた。「貴方たちが君に忠、親に孝という考えかたを守っているならば、これは即ち儒教だ。貴国の君から民に至るまでが読んでいるのは我が国の四書五経ではないか。貴国の民が皆この普遍的な道理を知っているのは自然なことである。貴国の先王が政治において実現し、書物に記したのは、一体どういうものか。庶民はそれを読むことができるのか」

張徳彝の詰問に答える人はおらず、議論が止まったという[31]。

宗教信仰を巡ってなされた若い中国人通訳官・張徳彝と日本の公費遣欧留学生との意味深い一問一答は、両者の背後にある文明意識の変化を如実に物語っている。明治維新直後とは言っても西洋を目指す途中の若い日本人だけに、儒教国から来た人の前で、大声でみずからの国教（神道）によるアイデンティティを主張しようにも、

なお自身の理解が不十分で主張し切れなかったものらしい。[32] それに対し儒教の普遍性をひたすら信じ、明治維新後の日本が儒教を保つか否かを見定めたがった張徳彝の焦燥感が、終始この対話に滲み出ている。

日本人との対話はまだまだ続く。一〇月二五日の夕飯の後に二人の日本人外交官と雑談をする。一人は弁務使、従五位の鮫山烏藤原信（本名は鮫島尚信）と自ら名乗り、年三〇近い。もう一人は権大記、正七位の塩田菅原篤信（本名は塩田三郎）という。年二〇ぐらい。二人とも交渉事務をするために英、仏、独へ赴く予定になっていて、英語に堪能であると張徳彝が記録している。[33] 雑談のなかで、塩田菅原篤信が、その場で漢詩「七律」一篇を書いて張徳彝に鑑賞と批評を求めてきた。こんな詩である。

欲避炎威倚玉欄、渺茫万里碧波瀾。去家既覚南来遠、北斗七星低不看。[34]

炎威を避けんと欲して玉欄に倚れば、渺茫として万里碧なる波瀾、家を去りて既に覚ゆ南来の遠きを、北斗の七星低くして見えず。

張徳彝はこれを高く評価すると、その若い日本人は大いに喜び、さらに旧作を披露した。

梅香雪影鄂羅夏、蛍火虫声印度春。踏遍東西万奇景、退成天地一閑人。[35]

梅香雪影ロシアの夏、蛍火虫声インドの春、踏みて遍くす東西万の奇景、退きて成らん天地の一閑人。

故郷を思う心情と世界万国を股にかける気概に張徳彝は大いに共鳴を覚え、最大級にこれを褒めた。それは二つの漢詩の水準の高さを讃えたというよりは、漢詩を詠む行為そのものへの評価であったろう。日本人との対話は、儒教や漢詩という共通の話題からはじまった。しかし新しい日本像を少しずつ展望していくことを期待していた中国人にとって、もっとも刺激的な話題は、やはり西洋文明の評価をめぐって日本人とそれぞれの考えかたをやりとりしあうことであった。

船が東にマラッカ海峡（当時イギリス領）、西にスマトラ島（当時オランダ領）が見える海域に入った一〇月二六日、建野郷三[36]という日本人との間に交わされた対話は、西洋文明をめぐって中国と日本のあるべき姿を議論したものであって、西洋と伝統文化との間で迷いながらも、時代の正しい方向を見さだめようとする二人の東洋人の共通な心をわかちあうものであった。

話題は建野郷三から切りだした。「我が国は昔から伝統の髪形や衣服をしていた。しかし近年になって雰囲気が一変し、すべて西洋に倣うようになった。貴国に比べると、甚だしく恥ずかしく思うが」と述べた。建野郷三は、自国の変革に対する不安や文明開化に邁進する中の日本人の心理的な揺れをありのままに伝えたかったのだろうが、張徳彝にはこれはむしろ西洋化を自慢していると聞こえたのかも知れない。そこで張徳彝は「大きい襟と広い袖の中国服は、神州固有の服装であって、何か恥じるものがあるだろうか。かといって西洋の有るものをもって、我々の足りないところを補うのも、また無益なことではなかろう」と、伝統文化の固持と西洋の良いものを取り入れることとは矛盾しないという考えかたを示した。

建野郷三がまた追ってたずねた。「其の有るものとは何だろうか」。張徳彝は「それはつまり軍艦、機械、武器の類であろう」と答えた。「そういったものは勿論有益であるが、しかし損もあるのではないか」という建野郷三に対して、張徳彝は「既に各国と条約を交わして通商をする以上、彼の長ずるこうしたところを学ばなければならない。それを拒んで為さないと、一旦災いが来たとき、後悔も及ばない」と西洋の「長技」を習う必要性を強く強調した。こういう張徳彝の脳裏にはアヘン戦争という中国の苦い過去の経験があり、魏源の「夷の長技を師とする」に近い考えが働いているのが明らかである。一方、西欧化を目指す明治日本に対する批判や反対意見を中国人から聞きだそうとした建野郷三からは、西欧化の志向と伝統への愛着との間に揺れている当人の心の奥を伺うことができる。建野郷三は一八四一年一月、福岡県小倉に生まれ、かつて幕末の政局に活躍し、小倉城落城後に同志と赤心隊を組織したが、一八七〇年の現在に難を逃れるためにイギリスに渡航する中の一人であった。

数日前からすでにインド洋に入った翌月の一一月六日の朝、張徳彝はインドの南の島々の景色や風物を目にしながらも、一昨日のクリスマスの夜（西暦一二月二五日）同船の人々が声高に聖歌を歌う情景が脳裏に思い浮かび上がらずにいられなかった。そこへ自分を訪ねてきた山田虎吉[37]という日本人と、「握手」という文明習慣に関して、また次のような面白い会話をした。ことの始まりは、中国人の同僚が山田に握手を求めたところから起きる。これについて山田が「握手礼にあらず」と言ったのに対して、張徳彝は次のように答えた。

入境問禁、入国問俗。書有明言。今所処之地、既非中華、亦非日本、以是礼行之、似無不宜。[38]

境に入りて禁を問い、国に入りては俗を問う。書にも明言あり。今居る所の地は、すでに中華に非ず、亦日本にも非ず。これをもって之を礼行すも、宜しからざること無きに似たり。

中華や日本以外では、中華の礼節にこだわる必要がないというのは、逆にいうと、中華の地では、西洋の礼を行うのも宜しからざることになる。この例からも分かるように、日本人は、中国人には中国風の礼を取ることを当たり前だと思う。しかし、中国人は、人種のいかんを問わず、その地にいればその地の礼を取ることを当たり前だと考えている。つまりここには、文明は特別な地域における特別な産物であって、全ての人間に共通するものではないという考え方が裏にある。[39] 一方山田の示した反応には、文明が地域よりも人間との関わりにおいて成り立つものという意識が作用している。故に中国人には中国の礼節で向かう一方で、西洋人には西洋の礼節で向かうのも当然な事である。西洋文明の優位を理解したら、その習慣を謙虚に取り入れるのもこうした論理の成り行きであろう。ヨーロッパで西洋人相手の交渉や日常生活全般を通して、中国の伝統的な礼服で臨んだ張徳彝らには異なる文明間の政治交渉という意識があったが、一方もし普段は洋服を着て、公務には、和服を着て臨むという張徳彝が記録した当時の日本人の行動様式が本当だったとすれば、ここにも西洋の文明を最高のものとして認め、西洋人と西洋文明に近づこうとする姿勢と一国を代表しての政治的交渉は別個のものであるという日本人の自意識を見ることができるかも知れない。こうした差は、両者の行動様式から意識にいたるまであらゆる局面で好対照を成している。[40]

一一月一五日の朝、一昨日から風に乗って北へと紅海口に近づいた船から人々が見えたのは、西には山の多いアフリカの東の境界で、東には山の高いアジアの西の境界であった。凪の晴れ空に、夏のように暑い気温のなかで、思いがけずに同船のフランス人畢路安[41]（恐らく同行のフランス人教官ビュランのことであろう）によって日本をめぐる文明論争がまた引き起こされることになった。フランス人は日本の変化の速さを非常に褒めて、「ここ十余年以来、国の政治が大いに改新されたのみならず、民間の風俗も亦多く西洋式に改まった。蒸気船、汽車、電線などは、既に国中に通行した。衣服や建築等もまたしだいに様式を改めている」という。これに対して、「天下各国の政治と教育はそれぞれ国情に基づくものであり、その本来の面目を失わないのがよい。火器や車船に至っては、西洋の国々の多くは戦争を好むので、他の国としてはやむを得ずそれを倣わなくてはならぬ。他は必然性がないので、西洋の風に改めなければならない理由はない。日本は何でも泰西に真似るというが、大きな制度の方面はともかく、小さいことを挙げると、例えば、日本人の着ている服を西洋人の服と比べたらどうか」と張徳彝が反問した。「彼らの洋服の着用は西洋人にまだまだ遠い。なにしろその服装は、官民文武の等級区別もしていないのである」とフランス人は答えた。ここで張徳彝は西洋の全てを真似る必要がないという論理を展開して、最後に日本人の洋服と西洋の洋服との対照を通じて、日本人で

も完全な真似をしてはいないという結論を引き出したのである。

西洋人との日本論争を通じて、張徳彝は西洋人の日本賛美に対する反撃を繰り返したが、これで新生日本への好奇心が却って強まったのも事実である。一七日の夜、同船の日本人外交官菅原篤信（塩田三郎）の要請で、張徳彝は東洋人同士の連帯を詠む次のような詩を作って、自らの心境と新しい世界に対する期待を語った。

四海皆兄弟、瀛寰五大洲。遨游輿地外、数載弗能周。幸遇隣邦士、乗風溯上流。挑灯衷曲訴、詩酒足千秋。(42)

四海は皆兄弟、瀛寰（えいかん）たり五大洲。輿地の外に遨游し、数載するも周ることと能わず。幸いに隣邦の士に遇し、風に乗りて上流に溯る。灯をかかげて衷曲に訴わば、詩酒千秋に足る。

今まで以上に「隣邦の士」日本人の存在を意識し、日本人との交遊を楽しんだ様子がうかがえる。世界という舞台に登ろうとする東洋の大国中国、そして島国日本は、古来「中華天下」の隣邦でありながら、両国の間では日本人から中国文明に対する一方的な関心があっても、日本の存在に対する中国知識人の注目は殆どなかった。しかし西洋を含んだ十九世紀後半の世界の視点からみると、日本は中国の仲間であるばかりでなく、前述のように何度も張徳彝に「日本論争」をしかけてきた西洋人の目から見て、日本は一八七〇年当時ですでに近代化の優等生であり、また西洋化における中国の出遅れを映し出す鏡であった。中国人は、こうして西洋文明に向かい合うなかで、西洋人の間での評判を通じて再び「日本」を発見したとも言えよう。清末中国の若い官吏張徳彝が同じ西洋文明の導入を急いでいる日本人たちと南シナ海、インド洋上で邂逅したことは、清末の「日本発見」の序幕の一部を成したといってもよいのかも知れない。これはやがて実際に明治日本への滞在を経験する黄遵憲の「日本論」につながり、青春をかけて日本に渡った清国留学生の大群の出現を促すことになるのである。

注

（1）芳即正『島津斉彬』（吉川弘文館、一九九三年）、一八四頁。

（2）幕府の外国奉行の任にあった水野筑後守・岩瀬肥後守が自ら公使になり、幕府のなかの有能な人材を率いて新しい大陸アメリカへ赴き、その軍事と文化の状況を視察し、日本に改革の契機を与えようと提案したのである。これは直ちに時の老中堀田正睦や日本駐在初代アメリカ領事ハリスの賛意を得、申し出た両人が使節に内定された。

（3）福沢諭吉『新訂福翁自伝』（岩波書店、一九九五年）、一一六頁。

（4）同上、一一五頁。

（5）同上、一一六頁。

（6）同上、一一七頁。

（7）同上、一一五頁。

(8) 福沢諭吉「福沢全集緒言」、慶応義塾編纂『福沢諭吉全集』第一巻（岩波書店、一九六九年再版）、六頁。
(9) 当時通俗一般外国人のことを指す。同上、一一頁。
(10) 同上、一二～一三頁。
(11) 同上。
(12) 福沢諭吉「世界國盡」、同上、三七頁。
(13) 福沢諭吉「西洋旅案内」、前掲『全集』第二巻、一二一頁。
(14) 同上、四五七頁。
(15) 同上、四六三頁。
(16) これによって、西洋化が始まった一方、漸く長年の夢であった「中華」の概念も実現されたという説がある。しかし私はこの説について、「中華」という序列的な文明意識が西洋文明の価値観を受け入れる下地になったという意味においてなら賛成できるが、「中華」意識の昇華、或いはそれへの到達がそのまま西洋の文明観への転換に直結したというならば、適切であるとは思わない。中華志向と西洋志向との断層はすでに十八世紀以来の日本知識人における相対的な文明価値観に見いだすことができる。西洋文明の強力な刺激に晒されながら、「中華」意識と訣別したことこそが徳川後期日本思想の方向であった。その動きのなかで、多くの知識人は「清朝中国」に対する相対的な文明像や価値観を一応形成しおえていた。そしてそれと平行する形で、西洋の思想・学問へ共鳴する傾向が急速に進展していったのである。彼らは、世界とはなにか、世界における日本とはなにかという問題をみずからに問いつつ、世界を序列的に区分する意識に再び目覚めるようになった。そこで訣別した「中華」思想の真空を埋めるものとして、西洋文明の価値観を取り入れたと言える。ここに「中華」意識を持った清末中国と、日本の間に見られる、西洋に対する異なった対応の背後に隠されている要因の一つを見ることができる。渡辺浩「「進歩」と「中華」――日本の場合」、溝口雄三（他）編『アジアから考える〔5〕近代化像』（東京大学出版会、一九九四年）、一六七頁参照。
(17) 例えば、今の日本でも観念的にアジアを貧困と未開と思いこみ、現在アジアに起こりつつある繁栄と進取の現実に戸惑いを感じたり、西洋を文明の標本と思うあまり、西洋の目で世界を見る以外に視点がなく、西洋追従から脱出しにくかったりする人が多い。
(18) 広東香山の人。幼少から西洋式の教育を受け、一八四七～五四年にアメリカ留学。中国人として最初のエール大卒の一人である。後に児童のアメリカ留学を推進し、清の駐アメリカ副使を担当。帰国後、維新運動に参加し、失敗して再びアメリカに亡命、アメリカで生涯を終える。
(19) Yung Wing : My Life in China & America, New York, 1909 年版の直訳で、全二二章からなる。
(20) 容閎『西学東漸』、鐘叔河主編『走向世界叢書』第一輯第二冊、岳麓書社出版、一九八五年、一二四頁参照。平凡社東洋文庫版『西学東漸―容閎自伝』（百瀬弘訳注）の訳をも参照。
(21) 「同治一〇年七月一九日大学士両江総督曾国藩等奏」、『籌辦夷務始末』同治期巻八二、葉四六下参照。
(22) 容閎上掲書、六二頁参照。
(23) 清の政治家、清満族鑲黄旗（清満族の軍事、社会組織である八旗の一つ。黄、白、赤、青の四旗の上に、鑲黄、鑲白、鑲赤、鑲青の四旗を合わせて、八旗となる）の出身、一八四二年（道光二二

年）の挙人。一八六一年、三口通商大臣になり、天津で英、仏と租界の条約の改定に従事。翌年直隷総督に就任し、洋槍隊を組織して、捻軍に対抗する。一八六七年（同治六年）、天津機械製造局を設立。一八七〇年、天津でキリスト教会を襲撃し、多数の死傷者を出した事件、いわゆる天津教案を処理するためにフランスへ。一八七六年（光緒二年）奉天将軍に任される。一八七八年、ロシアとイリについての交渉に携って、ロシアに派遣。翌年、独断でロシアと『リバァディア条約』を調印したが、帰国後、朝廷の批准を得ることができず、さらにその罪を問われて逮捕されることになった。中国歴史大辞典・清史巻編纂委員会編『中国歴史大辞典・清史巻』下（上海辞書出版社出版、一九九二年）参照。

(24) 清満族鑲黄旗の出身、一八六二年（同治元年）同文館英文班に入り、六五年、総署の試験を受けて、八品官に選ばれた。翌年赫徳等に従ってヨーロッパを訪問。一八六八年、また使節団の通訳として、ヨーロッパやアメリカを訪問。一八七〇年、崇厚に従ってフランスに渡って、通訳を担当。一八八七年（光緒一三年）、洪鈞に従って駐ベルリン大使館に勤務。一八九〇年、帰国後総理衙門の英文正翻訳官になって、翌年光緒帝の英文教師をつとめる。一八九六年、駐英ロンドン大使館の参賛になり、一九〇一年から一九〇六年まで、それぞれイギリス、イタリア、ベルギーへの使節団の大臣を担当。前後して八回程出国し、その記録を『航海述奇』や『再述奇』、『八述奇』に著す。他に『使仏雑記』、『使英雑記』がある。広く西洋の社会や文化についての知識と見解を持っていた。上掲中国歴史大辞典・清史巻編纂委員会編『中国歴史大辞典・清史巻』上、参照。

(25) 清朝廷の官名。太子少保は少師・少傅・少保という三少の一つで、三師の徳行を明らかにし皇太子に諭し、太子を奉じて三師の道徳を観ることを掌る。三口通商大臣は対外通商を司る行政官庁の長官で、一八四二～七〇年間に開港した場所は、台湾にもいくつかあったほかに、南から数えると、広洲、汕頭、厦門、福洲、寧波、上海、鎮江、九江、漢口、烟台、天津、牛荘とあるが、中の三つの通商口（港）を司る。兵部は軍関係の行政官庁で、兵部左侍郎は兵部尚書（大臣相当）に補佐して天下の武衛官軍の選授簡練の政令を掌る役職である。兵部左侍郎は兵部副大臣に当たる。

(26) 張徳彝『随使法国記』（即ち『三述奇』）、鐘叔河主編上掲書、三四七頁参照。

(27) 同上、三四九頁。

(28) 同上。

(29) 今度張徳彝と会話したこの一行は陸軍兵学寮の生徒で兵部省によってフランスへ派遣された国費留学生たちをも含むものであった。日本の兵部省は一八七〇年の一〇月に、陸軍兵学寮の生徒一〇名（楢崎頼三ら）をフランスへ派遣した。この学校は、もと慶応元年一二月に設けた陸軍学校を母体とし、フランスからシャノワンら十余名の軍事顧問を招いて、洋式軍事教育機関として、新政府に引き継がれたものである。この七〇年一〇月に、兵部省は、兵制のモデルを陸軍はフランス、海軍はイギリスに求めて編制することに決めたため、かれらは、同校教官のフランス騎兵大尉ビュラン（Bullant）とともに、横浜を発ってフランスに赴く途中であった。石附実『近代日本の海外留学史』（ミネルヴァ書房、一九七二年）、一四三頁参照。

(30) 張徳彝上掲書、三五〇頁。

(31) 同上、三五一頁。

(32) 張徳彝の記述によると、この対話に参加した日本人は野村尚赫、毛利親信、楢崎景福、小坂貫一、堀江春野の五人である。この五人の経歴などは次のようである。

野村尚赫は、恐らく野村小三郎の仮称である。生年月日は不明。岡山の出身で、一八七〇年、陸軍省兵学寮生徒として、フランスへ軍事学を勉強するため、ビュランに同行した一人である。一八七六年、パリで死亡。

毛利親信は通称毛利藤内、一八四九年一月一〇日、萩（現在の山口県）藩士村上亀之助の長男として生まれ、一八六五年、右田毛利家を継ぎ、六六年佐波郡諸兵の総督となり、以後幕長戦や長薩連合の推進、鳥羽伏見の戦い等を経験。一八六九年（明治二年）藩政改革によって施政司に任ぜられる。翌年四月、大阪に上りフランス式銃陣法を伝習する。一八七〇年一〇月、藩より派遣されてフランスに留学。フランスでは法律学、普通学などを学ぶが、病気のために一八七四年やむなく帰国。帰国後、周陽学舎を創立して子弟の教育に当たる。一八七九年、第百十国立銀行を設立して頭取となったが、一八八五年五月二三日、下関で持病の肺結核のため死去。

楢崎景福は通称楢崎頼三、一八四五年五月一五日、萩藩士・林源八の子として生まれる。初めは萩明倫館に学んだ。一八六一年一〇月、藩世子前詰となり、一八六三年下関に出て攘夷戦に参加した。一八六四年、楢崎殿衛豊資の養子になる。一八六六年六月の幕長戦に半隊司令として出陣した。一八六八年中隊司令となり各地に転戦。一八七〇年一〇月大阪兵学寮改称後の陸軍兵学寮幼年生として兵部省よりフランス兵学修業の留学を命ぜられて、寮仲間一〇人とともに師ビュランに率いられて、横浜を出帆。パリでミルマンに師事して軍事刑法とフランス語を学び、一八七三年、留学生取締りとなったが、一八七五年二月一七日、パリ滞在中肺病のため死亡した。

小坂貫一は恐らく小坂千尋の仮称である。一八五一年、岩国（山口県）藩士小坂猛右衛門英勝の子として生まれる。一八六九年、横浜兵学校に入学し、参謀学を修める。一八七〇年一〇月、陸軍省派遣によってフランスに渡りサンシール兵学校に入り、兵学を研修する。一八七七年一二月に同校を卒業する。一八七八年に帰国して士官学校学科部副提理となり、海岸防衛取調委員を兼ねる。一八八四年、大山巌に従い欧米諸国を歴遊する。同年に帰国して参謀本部第一局第二課長となる。一八八八年、山県監事に従って欧米諸国をめぐる。一八九〇年、軍務局第一軍事課長となる。一八九一年一一月七日死去。

堀江春野は大久保春野、堀江提一郎、堀田提一郎打、堀江提次郎ともいう。一八四六年八月一八日、大久保縫殿之助の子として遠江国（現在の静岡県西部）に生まれる。父と同じく八木美穂の門下となり国学を修める。鳥羽伏見の戦いののち、遠州地方の神主を中心に三百余名の報国隊を結成、その隊長となって従軍した。一八七〇年五月、大阪兵学寮の幼年学舎に入り、陸軍の命をうけ、同校教官・フランス騎兵大尉ビュランの帰国に同行して、一八七〇年一〇月から七五年までフランスに留学し、ロルネーイに師事。軍事刑法学を修める。帰国後陸軍省七等出仕となり、八〇年以後熊本鎮台歩兵連隊大隊長、歩兵第一二連隊長、戸山学校長、士官学校長、歩兵第七旅団長を経て、九六年に台湾征伐を行い、一九〇〇年に陸軍中将、教総参謀長、一九〇八年陸軍大将、韓国駐劄軍司令官となる。

一九一五年一月二五日死去。

以上の参考文献　大植四郎編『明治過去帳―物故人名辞典』（東京美術、一九七一年）、富田仁編『海を越えた日本人名辞典』（日外アイシェーツ、一九八五年）、日本歴史学会編『明治維新人名辞典』（吉川弘文館、一九八一年）、上掲石附実『近代日本の海外留学史』、手塚晃・国立教育会館編『明治幕末海外渡航者総覧』全三巻（柏書房、一九九二年）。

(33)　ここの鮫山烏藤原信は、実は一八七〇年に外務省設置とともに外務大丞となり、同一〇月にはイギリス、フランス、プロシアの三カ国を兼務し、少弁務使としてパリ在勤を命じられる、日本初の外交官である鮫島尚信であった。恐らく当時仮名を使ったのであろう。鮫島尚信は一八四五年、薩摩藩医鮫島淳愿の子として鹿児島に生まれる。一八六一年オランダ医学研究生として長崎に遊学し、英学を何礼之、瓜生寅に学ぶ。帰藩後開成所訓導師となるが、一八六五年、藩命によりイギリス留学生派遣のメンバーとなる。同年三月二二日、野田仲平と変名して鹿児島を立ちシンガポール、スエズ経由で各国の諸文明や世界情勢を概観しつつ五月二八日ロンドンに到着。ロンドンで語学に励む他に市街や兵器博物館、造船所、工場、農園等を見物し、同八月中旬、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ法文学部に入学。専攻学科は文学であった。一八六六年八月、夏期休暇を利用してアメリカに渡り、敬慕する宗教家T・L・ハリスのコロニを訪問、宗教的影響をうける。一八六七年四月、布教のためにイギリスを訪問したハリスと再会。同七月、渡米を決意し、森有礼らとともにハリス共同体・新生社に参加する。帰国後、ただちに明治新政府に出仕。外国官権判事、東京府判事、権大参事などを歴任する。そして一八七〇年、その海外体験を買われて、初めての外交官としてパリへ派遣。七二年一〇月弁理公使、七三年一一月特命全権公使となる。七五年四月に帰国し、寺島外務卿の下で外務次官となり、七八年一月、再び特命全権公使としてフランスへ渡る。一八八〇年一二月四日、パリの公使館で執務中死去。

ここの塩田菅原篤信は、一八七〇年四月、明治新政府のもとで民部省に入ったあと、すぐに外務省に移り特命全権公使鮫島尚信に随行して、イギリス、フランス、ドイツをまわり、さらにイタリアのローマで開かれる万国通信会議に出席するために渡航中の、塩田三郎の仮称であろう。

塩田三郎は幼名篤信、号松雲。一八四三年一一月六日、幕府の奥医師塩田順庵の子として江戸の浜町に生まれる。一八五九年、赴任する父に従い北海道の箱館に移住する。通詞の名村五八郎から英語を、栗本鋤雲から漢学を学び、さらに当時この地でフランス語学校を開いていたパリ外国宣教会神父メルメ・カションについてフランス語を学ぶ。こうした努力が認められて、箱館奉行の推薦によって通弁御用となり、アメリカ人鉱山学者に従って北海道各地を調査に歩く。一八六三年九月、北海道を発って江戸に戻り、通弁御用となる。一八六四年一二月二九日、外国奉行池田筑後守長発を正使とする遣仏使節に通弁御用出役として加わり、フランス船ル・モンジュ号に乗って横浜を出帆する。一八六五年、彼は再び通弁としてフランス、イギリス両国に派遣される。一八七〇年一〇月、特命全権公使鮫島尚信に随行して、イギリス、フランス、ドイツへ渡る。一八七一年、岩倉使節団に外務大記として随行し、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、スウェーデンなど一二カ国を回った。

七三年に帰国し外務大丞となったあと、外交交渉に尽力する。その後、外務大書記官、外務少輔を歴任し、七七年に官を辞したが、四年後再び外交の舞台に引き戻され、井上外務卿のもと外務少輔として各国との折衝に当たる。一八八五年、特命全権大使となり清国の北京に駐在した。一八八九年八月一二日、任地で肝臓炎のため死去。

以上の参考文献　公爵島津家編纂所編『薩藩海軍史』上・中・下（原書房、一九六八年）、尾佐竹猛『夷狄の国へ――幕末遣外使節物語』（万里閣書房、一九二九年）、上掲大植四郎編『明治過去帳―物故人名辞典』、上掲富田仁編『海を越えた日本人名辞典』、上掲日本歴史学会編『明治維新人名辞典』、上掲石附実『近代日本の海外留学史』、上掲手塚晃・国立教育会館編『明治幕末海外渡航者総覧』。

(34)　張徳彝上掲書、三五二頁。

(35)　同上。

(36)　一八四一年一月豊前国（福岡県）小倉藩士渡辺弥五兵衛の子として生まれる。のち牧野家に養われて弥次郎左衛門を名乗るが、一三歳のとき建野建三の養子となり建野郷三を称す。幕末の政局に活躍し、小倉城落城後に同志と赤心隊を組織する。一八七〇年に難を逃れてイギリスに留学する。帰国後、一八七七年西南戦争では警備隊に従軍する。宮内権大書記官、太政官権大書記官を経て、一八八〇年に大阪府知事となる。一八九〇年一一月、特命全権公使としてアメリカへ赴任する。翌年にはメキシコ特命全権公使を兼任する。一八九四年に実業界に入り、唐津工業鉄道、日本移民合資会社、内外物産貿易会社の役員を歴任する。一九〇八年二月一六日死去。

参考文献　上掲大植四郎編『明治過去帳―物故人名辞典』、上掲富田仁編『海を越えた日本人名辞典』、上掲日本歴史学会編『明治維新人名辞典』、上掲石附実『近代日本の海外留学史』、上掲手塚晃・国立教育会館編『明治幕末海外渡航者総覧』。

(37)　一八五四年豊津（福岡）藩士山田忠吾の長男として生まれる。一八六八年、藩の官費留学生としてイギリスに渡り、一八七〇年一一月フランスに移り、パリのエコール・サントラル（中央工科学校）へ入る。一八七六年同校土木建築科を卒業する。帰国後政府に雇われて、各地の土木工事、鉄道開設に携わる。一八九九年工学博士会推薦により工学博士となる。一九二七年三月三一日死去。

参考文献　井関九郎編『大日本博士録五　工学』（発展社、一九三〇年）、上掲富田仁編『海を越えた日本人名辞典』、上掲石附実『近代日本の海外留学史』。

(38)　張徳彝上掲書、三五七頁参照。

(39)　これはむしろ一種の文明相対主義的な発想であって、「中華」思想とは決して相いれないものであった。この発想においては西洋文明の肯定と自国文明の保持が表裏を成している。つまり西洋文明と自国文明を相対的に見た張徳彝らは、「中華」思想をこえて、新しい相対的な文明像に辿り着いたと言える。

(40)　このような対照は日中両国における近代史の異なる進みかたにおいても見られる。文明的に相対意識を持った中国人は、西洋文明を文明の一つとして認めても、それを絶対化しなかった。良いところだけを取り入れようとする選択と取捨は、後世の大きな悩みと課題になっている。一方日本人は文明と人間とを結びつけることによって、西洋文明の優位から西洋人優位の結論を引き出し、結局西洋文明を以て、遅れた日本人を「開化」し、文明開化という急速な西洋化運動を経て、近代化の優等生の称号を勝ち取ったと言える。

(41) 幕末、横浜に設置された仏国語学校で教鞭をとった仏国士官。一八六四年、幕府は仏公使ロッシュの勧告を容れて、官営の仏語学伝習所が、一八六五年三月開校された。学校事務は外国奉行が総管し教授上の事は仏公使書記官カションが当たったが、当時横浜に駐屯していたビュランは、ブラン・ルヌル・ヴーヴらとともに、仏語のほか、地理・歴史・数学等を幕府子弟に教授した。一八七〇年一〇月、ビュランは陸軍兵学寮の生徒一〇名（楢崎頼三ら）とともに横浜を発ってフランスに赴く途中であった。上掲日本歴史学会編『明治維新人名辞典』、上掲石附実『近代日本の海外留学史』参照。

(42) 張徳彝上掲書、三六二頁。